

平成 4 年 7 月 15 日

発行 青梅市文化財保護指導員連絡協議会

青梅市郷土資料室

(青梅市駒木町 1-684 Tel0428-23-6859)

霞川の鯉

青梅市内のほぼ中心部から北東方面へ、霞川が流れています。霞川は根ヶ布の天寧寺境内にある霞池や、勝沼の青梅風の子太陽の子広場内を流れる柿沢などを水源としており、途中、吹上に源を発する中川や今井の七国峠に源を発する後川、あるいは藤橋の水窪に源を発する矢幡堀などの中小の支流を合流させて、東の入間市へ流下しています。水源から金子橋までの流路延長は約 6.7km で、約 7k m²の流路面積です。

北側の加治丘陵（霞丘陵とも呼ばれる）と、南側の武蔵野台地との間を流れる霞川の歴史は古く、地質学で「下末吉期」と呼ばれる今から約 13 万年前頃に、現在とほぼ同じ位置に流路が決定されてから以降、周辺地域の自然や人々の歴史を見守り続けて来ました。

自然の状態における川の幅や深さは、流域における降水量や雨の降り方、あるいは地質条件などによって決定されています、諺に「自然にまかせる」と言うのは、この事を最も端的に表わしています。現在の霞川は周辺より 2.5～3.0m 深く、また川幅も市立第四小学校付近では 4～5m、金子橋付近で 10m 前後になっており、また両岸は味気ないコンクリートで固められています、これは昭和 25 年度から昭和 44 年度の工事によるものです。かつての霞川の流路は大きく蛇行し、所々に深い淵が形成され、そこにはウナギやフナを始めとした魚類や貝類が生息し、子供たちが水辺で遊んでいました。また、霞川の水は両岸の水田地帯の灌漑用水としても利用されていました。

ところで 7～8 年前から霞川の各所で、コイが泳いでいるのが見られるようになりました。これは霞川を愛する人々が、清流復活を願ってコイを放流したためです。時には心無い人によって盗み取られることもありましたが、霞川を愛する人たちは、河原のゴミを拾い、また両岸の草を刈り取って、コイやフナなどの魚類が住み易くなるために汗を流すようになりました。さらに、平成 2 年には、藤橋の宮本納税組合によって 600 匹以上のコイが漂流され、今では大門から金子橋までの、霞川のいたるところでコイやフナなどが泳いでいる姿を見ることができます。

私は、川の姿とそこに泳ぐ魚は、流域に住む人々の文化の高さを示していると思います。

(文責 角田清美)